

## 躬恒・忠岑問答歌

工藤重矩

(一九七五年九月一〇日受理)

「躬恒集」「忠岑集」「拾遺集」に一連の問答歌が収載されている。躬恒・忠岑・伊衡の三人がその詠者である。歌集によって歌数配列に異なる所もあるが、菊地靖彦氏により整理再構成されている。筆者は藤原伊衡の伝記<sup>(2)</sup>を考えた際に伊衡と躬恒・忠岑との間に交された問答については簡単な言及した。そこで此の度は躬恒と忠岑とでなされた問答をとりあげようと思う。

### 一

躬恒と忠岑の問答歌は十五組三十首からなっており、このうち十三組は「いづれまされり」と発問し「はまされり」と返答する優劣論議で、残る二組は問答ではなく物名歌の競作であるが、便宜上一括して扱う。

問答の一つに次のようなものがある。

21 あた人をたのまんことゝかりのこをかさねてみんといつれまされり(躬恒)

22 とりのこはかさねてしはしありぬとも人をたのまんことのは

かなさ(忠岑)

これは峯岸博士も指摘している通り、「伊勢物語」五〇段の「とりのこをとつゝとをはかさぬともおもはぬひとをおもふものかは」と関係がありそうである。「伊勢物語」の歌は「古今和歌六帖」には友則作でとられている。問答歌の成立年時、「伊勢物語」が五〇段を備えた時期などに関連して考えねばならぬ故に、どちらがどうとは言えないが、両者に何らかの関係はありそうである。

このように一つ一つの問答を見てみると、その問答が踏えていると思しき和歌をほぼ全組に亘って指摘することができる。つまりこの問答は、躬恒と忠岑が思いつくままに問答したのではなく、ある共通の知識の上に立って展開されている。本稿ではこの事を明らかにしたいと思う。

便宜上、問答歌の全体を次に示す。底本は「忠岑集」<sup>(4)</sup>である。問は全て躬恒、答は全て忠岑なので、底本の表記を改め、(躬)(忠)と略記した。通し番号を付した。

- みつねたゝみねかゝたみにおもひけることをとひこたへける  
 1 そらにたつはるのかすみとわかこひときせぬものはいつれ  
 まされり(躬)  
 2 たゝぬ日もたつひもかすみあるものをいかなるよにかこひは  
 たゆへき(忠)  
 3 きみこひてきえかへる身とくさのはにおくしらつゆといつれ  
 まされり(躬)  
 4 こひはたゝいのちにかけてあるものをいかなるよにかつゆは  
 たゆへき(忠)  
 5 よの中におもひいたらぬくまなきとそらふく風といつれま  
 されり(躬)  
 6 おもひやるこゝろのほとははてもなしかせのいたらぬくまは  
 おほかり(忠)  
 7 人しれすうきたるこひをするひとゝそらふくかせといつれま  
 されり(躬)  
 8 かせふけはそらにむらちるくもよりもうきてこひする人はま  
 されり(忠)  
 9 こひわひていつるなみたのつきせぬとはるのなかめといつれ  
 まされり(躬)  
 10 みをしれはいつるなみたもあはれなりはるのなかめはつねの  
 ぶること(忠)
- 11 よの人のあたにたつなとあきゝりのそらにたつなといつれま  
 されり(躬)  
 12 あきゝりはたゝぬをりもありはれもせぬふりなんなをはいか  
 らさためむ(忠)  
 13 あはんとてまつゆふくれとよをこめてゆくあか月といつれま  
 されり(躬)  
 14 まつほとはたのみもふかしよをこめてゆくあか月のことはま  
 されり(忠)  
 15 わたつうみのちいろのそことかきりなくふかきおもひといつ  
 れまされり(躬)  
 16 ふかけれとちいろのそこはかすしりぬひとのおもひはさをも  
 さゝれす(忠)  
 17 つれもなき人のこゝろをみるよりは身をなけつるといつれま  
 されり(躬)  
 18 うしといひてあやなゝとしも身をなけむいきであるみのこと  
 はまされり(忠)  
 19 はるゝと山のはすきてゆく月とすきゆくあきといつれま  
 されり(躬)  
 20 あきはつることはあはれもまさりなむいりぬる月はよのまは  
 かりを(忠)  
 21 あた人をたのまんことゝかりのこをかかねてみんなといつれま  
 されり(躬)

- 22 　　とりのこはかさねてしはしありぬへし人をたのまむことの  
　　かなさ(忠)
- 23 　　つらきをもうきをもいてはおもはんといろにいてんといつれ  
　　まされり(躬)
- 24 　　うきことをいひてしるしのなきよりはこゝろにこめてあるは  
　　まされり(忠)
- 25 　　こひするにきえかへる身とはるたちてふりくるゆきといつれ  
　　まされり(躬)
- 26 　　こひするにきえかへるともみはうせしはるふるゆきのあとは  
　　とまるや(忠)
- 27 　　　からさき  
　　なみのはなおきからさきてちりくめりみつのはるとはかせや  
　　なるらん(躬)
- 28 　　いかて人これからさきにわたりけんみつのうへにはあともみ  
　　えぬを(忠)
- 29 　　　うりふさか  
　　としふれとなるともみえぬうりふさかはるのかすみのたては  
　　なりけり(躬)
- 30 　　としふれとはうともみえぬつゝらおりゆきゝの人のくれはな  
　　りけり(忠)
- (30) 　　としふれとあふともみえぬつゝらをりはるのかすみのたては

なりけり(躬)

## 二

順序は前後するが、比較的顯著な例をまず示しておく。

- 5 　　よの中におもひいたらぬくまなきとそらふく風といづれまさ  
　　れり(躬)

- 6 　　おもひやるこゝろのほどははてもなしかげのいたらぬくま  
　　はおほかり(忠)

問は「おもひいたらぬくまなき」と「そらふく風」との優劣を比較しているのだが、二者のどのような性格を言っているかとなるとこのままでは必しも明白ではない。例えば、1の問は「空に立つ春の霞」と「我が恋」とで「つきせぬ」という性質を比較している。

これは歌の中にはっきり言っているのですぐに分る。このように比較すべき内容を明言しているのは他には9だけである。従つて或いは全組「つきせぬもの」を比較しているかとも一応は考えてみても、各問を検討すればそうではないと知れる。

ところが、5と6は「古今集」の歌を媒介とすることに拠つて、恋の案内者に関する比較であることが判る。「空吹く風」が恋の道案内であることは、恋一(四七二)に

白波のあとなきかたに行く舟も風ぞたよりのしるべなりける

とある歌がこれである。「風のしるべ」という言い方は「花の香

(勝臣)

を風のたよりにたぐへてぞ驚きそふしるべにはやる（春上、友則）があるが、答歌との関連で勝臣の歌に拠っていると考えた方がよい。

「おもひいたらぬくまなき」とは配慮の行き届かぬ所が無いの意で、「源氏物語」花宴に「思ひいたらぬくまなき良清・惟光」に臘月夜尚侍の素性を探らせる話がある。この例から推しても「人」と「風」とを比較しているのだと考え得る。人は「思ひ至らぬ限なき」人であり、風はどこを吹くとも判らない不安定なものである。この両者を比較するところに問としての面白さがあつたのである。

ところが6の答は「おもひやるころのほどははてもなし」とあつて、「ころ」を問題にしている。「思ひ至らぬ限なき」人の「ころ」と考えれば、問の歌とも矛盾はしないが、「思ひやる心」というのは、離れている相手を思う心と解すべきであろう。すると、問の歌では、恋の案内者を言っていたのに、答では恋する人自身の心となっていて、問と答の間にズレがあるように思える。何故このようなことになったかと考えるに、先の「白波の」から五首を隔てて、恋一（四七七）に

しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなり  
けれ（よみ人しらず）

があり、更に二首を隔てて、四八〇に、

たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につぐるなりなり  
（元方）

がある。これらに拠って、「思ひ」もまた恋の案内者であることが

知られる。忠岑が答で「思ひやるころ」と言うのは、これらの歌に拠っているのではないかと思う。忠岑は、問が、四七二に拠っていることを知り、同じく「古今集」の数首しか隔っていない四七七・四八〇を利用して答えているのである。

整理して言えば、

躬恒「古今集では風が恋の頼みとする道案内だと言うが、これとかゆい所に手のとどく手練とではどちらが仲介者として勝れているか」

忠岑「いえいえ、古今集では思ひだけが恋の案内者だと言っています。まことに恋する人を思う心の行く所は果しありません。ところが風の吹き届かない所は多いものです。」

この問答は明らかに「古今集」の恋部の歌を踏えることによって問答を組み立てているように思われる。

#### \* 7

人しれは命ずは命きたるは命こひをするひとそ恋とやうそら吹かぜといづれまさは命れり（躬）

8 かぜふけばは命そらにむらは命ちるくもよりもうきてこひする人はまさは命れり（忠）

答歌からみて雲の方が正しいであろう。「吹く風」は5からの錯視による誤写であろう。この問は「人知れず浮きたる恋をする人」と「空ゆく雲」が比較の対象となっている。7の「空ゆく雲」は不安定なものとして用いているようである。「人知れず浮きたる恋を

する人」は「古今集」恋二（五九二）

たぎつ瀬にねざしとどめぬ浮草のうきたるこひも我はするかな

（忠岑）

に拠ってしよう。作者は忠岑である。躬恒は戯れているのである。

これに対する答はやはり恋二（六〇一）の

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か（忠岑）

に拠っている。問が忠岑の歌だったので、忠岑もまた自分の作を用いて答としたのである。

この問答においても典拠となった「古今集」は「五九二」と「六〇一」であり、甚だ近接している。問者・答者共に「古今集」を見ながら、問の拠っている歌も二人確認の上で問答しているのではないかと推量される。

＊

二組ほど顕著な例を見たのだが、以下も強弱はあるが如上の性質を備えている。前に戻って以下順次「古今集」を中心として問答の典拠を検討する。

- 1 そらにたつはるのかすみとわがこひとつきせぬものはいづれ  
まされり（躬）

- 2 たぐぬ日もたつひもかすみあるものをいかなるよにかこひは  
たゆべき（忠）

空に立つ霞は春の歌枕で、どの歌に拠っていると言うまでもないが、霞と恋とを関連させた歌は「古今集」には乏しい。強いて挙げ

れば、恋三（六七五）「君によりわが名は花に春霞野にも山にも立

ちみちにけり」（よみ人しらず）また恋一（四八八）「わが恋はむ

なしき空にみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし」は、霞は詠み込

んでいないが、恋が霞・霧の如く空に立ち渡ると言う点で、恋と霞

の比較が成り立ち得ることを示す。問歌の「わが恋」という言葉は

「四八八」の「わが恋」を承けているとも考えられる。ここで何故に「霞」と「恋」とが比較の対象となっているのか考えてみる必要がある。「万葉集」には卷十に「寄霧」の題で春の相聞が六首並び、

他の卷々にも霞・霧と関連した相聞歌が散見する。「古今集」では

「六七五」「五一三」などである。従って、霞・霧は恋と結び付い

て詠まれることがあり、躬恒の問はこれに拠っていることなのである。

元来、恋の心象を託すべき物象としての霞（霧）であるものを、既

に成立している春の歌枕としての「霞」を独立にとりあげて、その

霞に託すはずの「わが恋」と比較している。この問の興味は本来分

離できないものを分離して比較する所にあったのであろう。

忠岑の答の歌は「古今集」に典拠はない。「万葉集」（11／2

四四二）に「大土 採離盡 世中 盡不得物 恋 在」という、

やや類似の歌があるが、直接の関係はないであろう。

＊

- 3 きみこひてきえかへる身とくさのほにおくしらつゆといづれ  
まされり（躬）

- 4 こひはたぐいのちにかけてあるものをいかなるよにかつゆは

## たゆべき(忠)

この問答も前組同様歌枕の心象と物象とを分離して比較したものである。答歌の下句が「——あるものをいかなるよにかつゆ(こひ)はたゆへき」と同構文を以てする点からも、「12」と「34」とは一对の問答である。

「君恋ひて消えかへる身」と「草の葉に置く白露」との比較。どちらも儚なく消えるものだが、どちらがより切なさに於て心が深いかというのであろう。「古今集」から例示すれば、恋一(四七〇)に

おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし(素性)

恋二(六一五)に

いのちやはなにそは露のあだものをあふにしかへば惜しからなくに(友則)

これらは、特に前者は恋歌において、露に恋のために消え返る身を寓している。「後撰集」恋三(七二一)には業平の「恋しきに消えかへりつゝ朝露のけさはおきるむ心地こそせね」などがあり、この問答が行れた頃には、恋歌において、露といえば、思ひ焦がれて消える身という関連が成立していたと考えてよからう。ここに於て、躬恒の問は成立するのである。

答の歌「いのちにかけて」は直接の典拠を見出し得ないが、「後撰集」雑二(一一三一)に「我のりしことをうしとや消えにけん草

葉にかゝる露の命は」(閑院のみこ)という歌がある。この歌は、元永本古今集では源宗岳娘の作で「わがのりしことをうしとやおもひけむ草葉にかゝる露の命を」となっている。定家本系には無いが、躬恒らの見た古今集にこの歌が無かったとは言えないので、ここにとりあげる。露の命が草葉にかかっているのに対し恋は命にかけてのことなのであろう。

## \*

9 こひわびていづるなみだのつきせぬとはるのがめといづれまされり(躬)

10 みをしればいづるなみだもあはれなりはるのがめはつねのふること(忠)

「涙」と「春の長雨」の比較。3の「身」と「露」の比較と同趣である。前問同様、恋歌では長雨は恋心を託すべき春の景物である。

恋三(六一六)

おきもせずねもせでよるをあかしては春のものとてながめくらしつ(業平)

恋三(六一七)

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし

(敏行)

また春下(一一三)の小町の歌

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

は春の部の歌だが、人事をも含むとすれば、長雨―ながめ(嘆)―涙はひとつづきのものである。「恋わびて出づる涙」という句を持つ歌は「古今集」にないが、類似の歌は、恋五(八二三)に

わびはつる時さへものゝ悲しきはいづこをしのぶ涙なるらむ

(よみ人しらず)

「恋わぶ」は恋二(五五八)に「恋わびてうちぬるなかに」(敏行)がある。

以上の如く問の歌は、これと指摘すべき歌は見出しにくいが、当時の和歌的常識に従っていることは明らかである。答歌の「みをしれば」には具体的な典故がある。「古今集」雑下(九四一)

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり

(よみ人しらず)

答は「みをしればいづる涙もあはれなり」であるから、「九四一」を典故としてよかろうと思うが、「みをしる」のみをとれば、恋四(七〇五)の「かず／＼に思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」(業平)の方が一致するが、「雨」である点は「九四一」に劣る。「春のながめは常のふること」は前掲の業平や小町の歌を念頭においてのことであろう。特に業平・小町が詠んでいることが「ふること」と言う理由でもあるのだろう。

＊

- 11 よの人のあだに立つ名とあきぐりのそらに立つなといづれま  
されり(躬)  
(忠) (忠)

12

あきぐりはたゝぬをりもありはれもせぬふりなんなをばいか  
(忠) (忠)

ゞとゞめむ(忠)

まず11の本文の異同について考える。底本によれば「あだに立つ名」と「そらに立つ名」の比較で、世の人があだに立てる評判と秋露が空に立てる評判という言い方はこれまでと同様、人事と自然の対比に似ているが、内容は世の人が立てるあだ名と霧が立つように立つ(或は霧が立てる)空なる名つまり無き名との比較である。しかしながら答歌を見ると「はれもせぬふりなんな」と「あきぐり」が比較されており、「はれもせぬ」が「無き名」を暗示するとすれば、問の「あきぐり」は「空に立つ名」だったから、共に無き名について言うことになり不審である。「躬Ⅲ」や「忠Ⅲ」によって「あきぐりの空にふるとはいづれまされり」を採ると、世の人が立てる噂と秋霧が立つのとはどちらが繁くあるかという問になり、答は「秋霧は立たぬ時もあるが、世の人の晴れ間もない雨のように降りかゝってくる噂をどうして止めることができようか」となって意味ははっきりする。後者を採るべきであろう。

この問答で、何故、「秋霧の空にふる」と「名」とが比較されているのか、「古今集」には根拠となるべき歌を見出し得ない。「古今集」恋三(六七五)「君によりわが名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり」(よみ人しらず)は、名が春霞の立つ如くに立ち満つという。これから類推すれば、秋霧が立つという自然現象と噂が立つという人事との比較はありうることはあろう。「後撰集」恋四

(八四四)には「鏡山あけてきつれば秋ぎりのけさやたらんあふみてふ名は」(坂上恒蔭)がある。恒蔭は八七九年の生れであるから、延喜・朱雀朝の人である。従って、延喜時代には「霧」と「名」との比較も行い得たであろう。逆に言えばこの問答が、霧が立つと名が立つとの関係の成立を示しているであろう。

＊

13 あはんとてまつゆふぐれとよをこめてゆくあか月といづれま

されり(躬)

14 まつほどはたのみもふかしよをこめてゆくあか月のことはま  
おきわかるゝ恋は(忠)おきてわかるゝ  
 されり(忠)

この問は「元良親王御集」「後撰集」等に見える元良親王の「くや／＼とまつぐれと今はとてかへるあしたといづれまされり」と内容は同じである。元良親王は天慶六(九四三)年の没だから、どちらが先とも判断できないが、「夕暮」と「暁」との比較は躬恒の時代とくに珍しいというほどではなかったようで、貫之にも「暁となにかいひけんわかるればよぬもいとそわびしかりけれ」(後撰集・恋一、五〇九)がある。貫之の歌はおそらく「古今集」恋三(六二五)忠岑の「有明のつれなくみえし別より暁ばかりうきものはなし」を踏えているのであろう。但し、これは、部立からは逢わずに帰る暁である。躬恒の問もまた、この忠岑の歌を意識したものであろう。「古今集」では恋五の「七七〇」から「七七九」にかけて待つ恋の歌が並んでおり、「六三七」から「六四三」にかけては

後朝の歌である。「忠Ⅲ」と「躬Ⅲ」は第四句「おきてわかるゝ」とあるが、恋三(六四一)の「郭公夢かうつゝかあさつゆのおきてわかれし暁のこゑ」(よみ人しらず)は語句が類似する。この問答は特定の歌を踏まえてではなく、「待恋」「後朝」という恋のパターンに拠っての問答であろう。その意味では前問と共に、直接的には「古今集」箇々の歌を典拠としておらず、「古今集」を含めた当時の和歌的環境自体が問答成立の基盤となつていゝと言えよう。

＊

15 わたつうみのちいろのそことかぎりくふかきおもひといづれ  
ひ(忠) 氏(躬)  
 まされり(躬)

16 ふかけれどちいろのそこはかずしりぬひとのおもひはさをも  
ひ(忠) 氏(躬)  
 さくれず(忠)

「古今集」には、わたつみと深き思とを関連させて詠んだ歌は、  
 雑躰の長歌(一〇〇一)に「わたつみの沖を深めておもひてしおもひはいまは」があるにすぎないが、「後撰集」になると、恋一(五八五)の「わたつ海に深き心のなかりせば何かは君を怨みしもせん」(よみ人しらず)恋三(七四六)の「わたのそこかづきてしらん君かため思ふ心のふかさくらへに」(友則)恋四(七九九)の「玉もかるあまにはあらねどわたつみのそこぬもしらず入心哉」(友則)また恋二(六一九)の「わたつみとたのめし事もあせぬれば我ぞわが身のうらはうらむる」(伊勢)などは「わたつみ」が「深き心」の比喩として既に延喜時代には成立していたことを物語る。特に



「七四六」の友則の歌の「思ふ心の深さくらべに」とあるのは、躬恒らの問答と関係があるかもしれない。ともかくもこの問答は(12)の様式と同じく、喩えるものと喩えられるものとの比較である。

答歌は海は深いと言えども「ちひろ」と限りは知れている。しかし心の深さは棹をさして測ることはできない。だから心の方がずっと深いのだ。思ひに棹をさすという言い方は見出し得ていないが、「後撰集」春下(一二七)「さほさせどふかさもしらぬふちなれば色をば人もしらじとぞ思」(貫之)という例はある。これらを応用した言い方であろうか。なお16は「続古今集」雜下(一八五八)に題しらずで「——ほどしりぬ人の思は棹もおよばず」として採られている。

## \*

17 つれもなき人のこころをみるよりは身をなげつるといづれま

されり(躬)

18 うしといひてあやなくども身をなげむいきてあるみのこと

はまさされり(忠)

17は文脈がすっきりしないが、むざ／＼と相手のつれなさをまのあたりに見せつけられるのと、それよりはいつそ死んでしまうのとどちらがよいかというのである。「古今集」雜下(一〇六一)「世中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそあさくなりなめ」(よみ人しらず)は18の「うしといひて」の典拠であろう。「いきてあるみの」については、恋五(八〇六)「身をうしと思ふに消えぬものな

ればかくてもへぬる世にこそありけれ」(よみ人しらず)春下(九七)「春ごとに花のさかりはありなめどあひみんことは命なりけり」(よみ人しらず)あるいは「躬恒集」の「ことさらにしなん事こそかたからめいきてかひなき物思ふ身は」など関係あるかとも思うが、これらの歌を踏えてというよりは、和歌を離れての生活者的思考であらう。

## \*

19 はる／＼と山のはすぎてゆく月とすぎゆくあきといづれまさ

れり(躬)

20 きはつることはあはれもまさりなむいりぬる月はよのまばか

りを(忠)

19の「すぎてゆく月」の異文については、「すぎゆく」では「すぎゆく秋」と同文であること、20の答で「いりぬる月」とあることなどから、「山のはさしている月」とあるのがよいであろう。というのも躬恒には「照る月を弓張としもいふことは山の端さしていればなりけり」(大和物語・一三二段)という歌があるからである。「はる／＼」は「伊勢集」に「はる／＼と雲居をさして行舟の行きさきとをき心ちこそすれ」(西本願寺本・72)があり、上句が問歌に類似している。「すぎゆく秋」は、「古今集」秋下(三〇〇)の「神なびの山をすぎゆく秋なれば」があり、「後撰集」秋下(四四一)に「はかなく秋はすぎぬべらなり」(貫之)同(四三八)「過行く秋やいづちなるらむ」(よみ人しらず)などがある。

月の入るのを惜しむ歌は多いが、「古今集」雜上(八八三)同(八八四)の二首を挙げればよいであろう。「八八四」は業平の「あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなむ」である。秋の過ぎるのを惜しむ歌も一々は例示するまでもない。「古今集」では三〇八から三一三がそれにあたる。三一二は躬恒の歌。

問は秋も月も過ぎ去るのは共に惜しいが、どちらがより惜しいかというのである。答歌「あきはつることはあはれもまさりなむ」には、秋が果てるということと飽きてしまうという意とが掛けられているであろう。「古今集」秋下(三〇八)「かれる田におふるひつちのほに出でぬは世をいまさらにあきはてぬとか」(よみ人しらず)は秋の部に入っているが、諸注説く如く人事を含んだ歌である。ただ厭世の意にとる註が多いが、「ほにいでぬ」「あきはつ」は恋の歌であるように思う。「古今集」では恋歌で「秋」と「飽」を掛ける歌は多いが「あきはつ」としては無い。「後撰集」になると秋下(四三九)、冬(四四八)、雜四(一一三〇一)に「あきはつ」があるが、いずれも恋の歌で恋人から飽きられることに用いられている。(いずれもよみ人しらず)「ほにいづ」というのが恋歌に多用されることは例示するまでもない。これらを以て推せば、「秋のはつる心を竜田川を思ひやりてよめる」(古今三一一)という詞書にみるように純粹に季節の秋が終るの意で用いた例もあるが、忠岑の歌は恋の意も含ませていると考えた方がよいであろう。「いりぬる月は

よのまばかりぞ」は「隠れにし月はめぐりて出くれど」(大和物語九七段忠平)あるいは「あけぬればくるゝものとはしりながらなほうらめしきあさばらけかな」(後拾遺・恋一・六七二道信)に詠まれる如くである。「よのま」はほんのみじかい間の意である。夜の間では意味が通らない。答の歌は、入った月(朝になって帰った男)はほんのしばらくまでばよい、しかし、あきはてられてしまうのは、ずっとあはれも深いであろうという意になろう。表面は自然の秋の方が月よりは周期が長いことを言っているが、恋の意も掛けていると思われる。忠岑の趣向であろう。

# \*

23 つらきをもうきをもいはでたのま躬恒おもはんといろにいでんといづれ  
まされり(躬)

24 うきことをいひてしるしのなきよりはこゝろにこめてあるは  
まされり(忠)

忍ぶ恋と色に出る恋との比較。「古今集」恋一の四九一から四九七あたりが参考となる。「いはで思ふ」は「古今集」恋一(五三七)に「逢坂の関にながるゝいはしみづいはで心に思ひこそすれ」(よみ人しらず)があるが、「大和物語」一五二段に奈良の帝が「いはで」という鷹を愛していたが、それを飼育係が逃がしてしまった、恐れつつその旨を奏上すると、帝は「いはで思ふぞいふにまされる」と仰せられたという話があり、「古今六帖」第五には「心には下行水のわかかへりいはで思ふぞいふにまされる」という歌がある。こ

れが伝承歌だとすれば、躬恒・忠岑も知っていたであろうから、「いづれまされり」と発問するこの問答となら帝の「いはで思ふぞいふにまされる」とは問答体として符号し、「いふ」と「色にいづ」がほぼ同じ内容である故に、この問答に影響した可能性は大きい。

## \*

25 こひするにきえかへる身とはるたちてふりくるゆきといづれ  
まされり(躬)

26 こひするにきえかへるともみはうせじはるふるゆきのあととは  
とまるや(忠)

この問答は〔34〕と類似している。〔34〕は「身」と「白露」だったが、これは「白露」が「ふりくる雪」に変わっただけである。春の雪が「思ひ」に消えるという言い方は、「古今集」恋一(五五一)「奥山の菅の根しのぎふる雪のけぬとかいはんこひのしげきに」(よみ人しらず)恋二(五六六)「かきくらしふる白雪の下消えにきて物思ふころにもあるかな」(忠岑)恋三(六二一・よみ人しらず)などあり、「雪」も「露」と同様に恋に焦れる心を託されていたのである。4では露は絶えないと、その連続性に重点を置いているが、この答では雪は消えるが、人の身は消えないと、4とは逆の答え方をしている。これも趣向であろう。25 26は「忠岑集」(私家集大成所収Ⅳ)では24までの問答の次に伊衡関係の問答をはさんで最後に一組だけ離れて有り、他本には全く伝わらない。その

点に多少問題があり、あるいは〔34〕の変形されたものかとも考えるが、確証ないままに、独自の問答として扱った。もし元からあるものだとすれば、〔34〕の前後に位置すべきもののように思う。

## \*

からさき

27 なみのはなおきからさきてちりくめりみづのはるとはかせや  
なるらん(躬)

28 いかで人にしろれ忠これからさきにわたりけんみづのうへにはあともみ  
えぬを(忠)

27の物名歌は菊地氏も指摘するように「古今集」物名(四五九)の伊勢の歌である。27が躬恒と忠岑の問答の席で用いられたのなら、「すでに古今集によって公になってしまっているこの歌でもって忠岑に同題の歌をうながすべく問の代りとしたのである。」という菊地氏の見解に従わざるを得ない。ところが奇妙なことに28の歌は同じ物名(四五八)のあほのつねみの作「かのかたにいつからさきにわたりけむなみちはあともものこらざりけり」と酷似している。語句を同じくするのは傍線部分だけだが、「なみちはあともものこらざりけり」「みづのうへにはあともみえぬを」が全く別々に詠まれたとは考えにくい。もし28も事実忠岑の作だとすれば、わざと、経覧の作に似せたのであろう。躬恒が伊勢の歌を用いたので、それではと忠岑も経覧の歌を用いたのである。

## \*

うりふさか

29 としふれどなるともみえぬうりふさかはるのかすみのたてば

なりけり(躬)

つゝらおり

30 としふれどはうともみえぬつゝらおりゆきゝの人のくればな

りけり(躬?)

39 20は物名である。題は異なるが、29 30で一組である。この二首

は掛詞、縁語を駆使しており、しかも同じ箇所同じ言葉を用いて詠んでいる。つまり、「としふれど」 ともみえぬ 題の地名

「ばなりけり」という枠を決めておいて、空いた箇所にしかるべき語を入れて、可能なかぎり技巧を尽すことを競ったのである。

29の修辞、「なると」は△成る▽と△鳴戸▽「うりふさか」に地名の△瓜生坂▽と△瓜▽をかけている。うりふさかは瓜生野の坂であらう。瓜生野は大坂市南部大和川右岸の辺という。意は、年が経っても成りそうにもない瓜―瓜生坂から鳴戸も見えないが、それは春の霞が立っているからなのだった。

30の修辞、「はう(はふ)」は△かつらが延い繁る▽と△老いて這い歩く▽を、「つゝらをり」は△九十九折の坂▽と△つる草▽△曲った腰▽を、「くる」に△来る▽と△繰る▽を、つゝらはふ―くるは縁語。神楽歌の早歌に「本深山の小葛、末繰れ繰れ小葛」という歌がある。歌の意は、年はとったが、腰は曲っても這つているとも見えない九十九折の坂道、その道端の青葛はいっこう延びる

ようすもないのは、往来の人が来ては繰るからなのだ。忠岑の方がより技巧的である。

ところで「忠岑集」(大成所収Ⅳ)には「としふれどあふともみえぬつゝらをはるのかすみのたてばなりけり」という形で収められていて、作者は躬恒としているが、これは書写段階でのまぎれとする菊地氏の説に従ってよいであろう。

以上各問答についてその問答を成り立たせているであろう和歌的環境を指摘した。一、二の不確かな例はあるが、ほぼそれぞれが当時の和歌の知識の中で問われ判定されていることは認めてよからうと思う。中でも〔56〕〔78〕〔910〕〔2728〕は「古今集」の歌を具体的に踏まえており、〔12〕〔34〕〔1314〕〔1718〕〔1920〕〔2324〕〔2526〕は「古今集」の和歌的常識―歌枕の意味での―の上に立つてのことである。〔1112〕〔1516〕は延喜時代に定着しつゝあつた和歌的常識に拠っており、〔2122〕は「伊勢物語」あるいは伝承的なものの影響を考えうる。総じて、「古今集」的なものの上に立つての問答であると言ってよいであらう。躬恒と忠岑の問答は全く彼等の時代の和歌的環境を正確に反映しているのである。正確に反映していることは、二人が「古今集」を完全に知り尽していたということでもあるが、それ以上に二人はこの問答の場に「古今集」を持ち込んでいたことに拠っているのではないかと思う。〔56〕〔78〕などで典拠としている「古今集」の歌が

極めて近接したものであること、「5・6」は何ほどの説明がなければ問の意も理解しにくいこと、典拠となっている歌が恋の部に集中していること、「27・28」の物名歌は全く「古今集」と同じく極めて類似していることなどがその理由である。

「古今集」を繙きながらの問答であると仮定して、典拠となっている「古今集」の和歌を見てみると、それは次のような分布をしている。（＊はほぼ確実に典拠となっているもの）

[1・2]	＊488
	675
[3・4]	470
	(1068)
[5・6]	＊472
	＊477
[7・8]	＊592
	＊601
[9・10]	＊616
	＊941
[11・12]	675
[13・14]	＊625
[15・16]	
[17・18]	＊1061

前半の問答に関しては、ほぼ「古今集」の歌順と並行しているのが分る。「19・20」の組を保留すれば他は全て恋に関する問答であるから恋歌の巻々に典拠が多いのは当然であるが、問答の順序と「古今集」とが並行するということは、両者の関係が極めて強いことを示すものであり、先述の仮定を支持するものであろう。

次に、問答の展開の仕方と内容についてまとめよう。前記の如く「古今集」の側から見ると前半と後半とで断層があるが問答の内容からみても同じことが言える。各問答を簡単に表にすれば次の通りである。

	11・12	9・10	7・8	5・6	3・4	1・2
	秋霧のそらにふる 世の人のあだに立つ名 (秋の霧)	春の長雨 恋わびて出る涙 (春の雨)	空ゆく雲 人しれず浮たる恋をする人 (雲)	そら吹く風 思ひいたらぬくまなき人 (風)	草葉に置く白露 君恋ひて消へ返る身 (秋の白露)	空に立つ春の霞 わが恋 (春霞)
25・26	23・24	21・22	19・20	17・18	15・16	13・14
恋するに消えかへる身 はるたちてふりくる雪	つらきをもうきをもいはで思は るにいでん	あだ人をたのまんこと かりのこをかかねてみん	はる／＼と山のはさしている月 すぎゆく秋	つれもなき人の心をみる 身を投げつける	わたつみの千尋の底 かぎりなく浮き思ひ	あはんとて待つ夕暮 いまはとてかへる朝

1 から12までの六組は、人事と自然とを対比したものである。13から26までの七組は似た状況に於る優劣で人事に関するもの五組の中に、人事と自然型が二組混入している。

前半六組は更に二組づつに三分される。自然を主にして見れば、

春霞—白露(秋)、風—雲、春雨—秋霧、とそれぞれ対になっている。甚だ構成的である。人事の側から見れば、恋はいつの世にも有る—恋しさに消え返る—仲介者を求める—浮きたる恋—恋侘びて泣く—噂が立つ、ほぼ恋の展開に添っている。これは「古今集」の展開に拠った結果であろう。各答は全て人事の側をまさけりとする。

〔13 14〕〔17 18〕〔19 20〕〔21 22〕〔23 24〕の五組は類似の事態の中での優劣を論じている。このうち〔13 14〕〔19 20〕は同じ感情を催す時、〔17 18〕〔21 22〕〔23 24〕は或る感情に対処する行為、の選択に關しての問答である。〔15 16〕〔25 26〕は人事と自然の対比。これらが何を契機に展開しているのかはつきりしないが、12までで一応区切を付けて、13からは比較すべき対象の選び方を改めていることは明らかである。そして〔13 14〕〔17 18〕型の問答が、ある具体的な和歌を踏えてというよりは恋のパターン即ち「古今集」では和歌群と対応する形になっている点も、前半とは異っている。

ところで〔25 26〕は前述の通り24までの歌とひと続きではなく、一組離れて存在する。そこで、いま〔25 26〕を除くと、六組となり、内容的には〔13 14〕〔19 20〕、〔17 18〕〔23 24〕が対になり、残る〔15 16〕〔21 22〕は多少内容が異なるが、22「かりの子をかさねてみん」を自然に準ずると考えれば、対になり、前半同様二組づつが対をなすことになる。

後半の問答は行為の選択ということもあって、忠岑の答は、忠岑自身の考えを表わしているのではないかとも思われる。「いきてあ

るみのことはまさけり」などは、類似する和歌はあるとはいえ、そのことを感じさせる。前半に於ても、人事に關する事を全て勝れりとするのも、「いきてあるみ」と無関係ではないだろう。躬恒と忠岑はそういう共通の価値観を持って、これらの問答を娛しんでいるのであるに違いない。和歌的清談とでも言いえようか。

## 三

優劣問答としては古くから春秋優劣論があり、躬恒の判歌を伴う豊主と黒主の「論春秋歌合」もある<sup>(6)</sup>。それらの問答と躬恒・忠岑の問答とは、形式上「いづれまさけり」「はまさけり」とすることでは同じだが、比較の対象の選び方が躬恒・忠岑の方がより和歌的であると見える。素材が和歌的ということもあるが、和歌の技法そのものを対象としているのである。

各問答検討の際にも触れたが、前半六組は比喩するものとされるものとを対比している。このような比較の仕方はこれ以前には殆んど例がなく、管見に入ったものでは、「万葉集」<sup>(7)</sup>巻四の笠女郎が家持に贈った二十四首の中の一、一首、「八百口往濱之沙毛 吾恋二<sup>(8)</sup>豈不益歟 奥嶋守」(五九六)が、浜の沙石と恋との多さを比較している。「万葉集」で、恋の繁さを浜の沙石に喩えた例は、巻十二(三一六八)「衣袖之真若之浦之愛子地 間無時無吾恋鏝」が、「まなく」の序詞として用いられている。巻七には「寄浦沙」と題する二首があるが、一首は「愛子地」に「愛子」をかけ(一三

九二)、一首は「真直<sup>まなほ</sup>」の序としている。また「古今集」序のたとへ歌の例として「わが恋はよむともつきありそやみの涙のまさごはよみつくすとも」は「万葉集」三一六八の歌と同趣である。笠女郎の頃、涙の真砂と恋の繁さとの関連が固定したものであったかどうかはなおはっきりしないが、比較しようとするばできる状況ではある。

笠女郎の歌の影響を受けていると思われる歌が「土佐日記」にある。「わが髪は雪と磯べの白波といづれまされり沖つ島守」という舟君の歌である。この歌は、白髪と波とでその白さを比較している。人事と自然の対比という点では、笠女郎の歌とも躬恒らの問答とも同じだが、形式上は「雪」と「波」の比較である。白髪を一度雪に喩えて、その雪と白波を比較している点で、比較の仕方としてはより素直である。仮に「髪」と「雪」とを比較すれば、比較の仕方としてはより躬恒らの問答歌に近づくことになる。然しながら、その場合も、共に物象であり、視覚的に比較し易い。ところが「きみ恋ひて消え返る身」と「白露」の比較は、掛詞縁語の技法が成熟し、両者の結合が歌枕として成立していなければ、成立しにくい性質のものであろう。

「土佐日記」の歌は右のような視点から見れば、むしろ笠女郎の歌よりは後退していると言えるが、優劣論の流れからは、「土佐日記」式の方が主流である。春と秋、待つ宵と帰る朝、いはで思ふと色に出づなどの比較は躬恒・忠岑以外にも一般化した対象である。

笠女郎の歌は「寄物陳思」の物と思とを対比している点で躬恒・忠岑の先蹤をなす。しかしながら、優劣論の流れの上では孤立的である。「万葉集」にあつては、心象表現に類同性を持つ歌も物象叙述には独自性があるとされるが、心象と物象が固定的に結合しない状況では、「寄物陳思」の物と思とを比較するのは、特に意識してするのでない限り困難であろう。笠女郎は家持と同じ頃の人だが、やはり涙のまさごと恋の結合が笠女郎独自のものでなく、他にも例があるという状況が与って力あるのであろう。

躬恒・忠岑の問答歌は、明確な問答体で構成され、それが二人の間で交されている点で、笠女郎の一首の中で比較し判定をしている(沖つ島守はその判断が正しいかどうかを問われている)のよりも、一層物象と心象の分離比較が進んでいる。二人の間で交されているのは、分離比較が複数の間に承認されていることを示していて、自然現象事物に対する心象の固定化つまり、歌枕としての成立を前提としている事を物語る。躬恒・忠岑の問答歌は、素材の面でも、表現技法の面でも、「古今集」以後の平安朝和歌の展開と正確に対応しているのである。「古今集」の撰者であり、延喜期の中心的歌人である二人の作であつてみれば、それは当然とも言えるが、二人が「古今集」時代の和歌の方法を深く自覚していたこと、そして和歌に対する余裕によって、この機智に富んだ問答歌は生まれたのであろう。

## 註

- 1 「躬恒・忠岑・伊衡問答歌について」 (和歌文学研究 第二十九号 昭和48年6月)
- 2 「藤原伊衡伝」 (文学研究 第七十二輯 昭和50年3月)
- 3 「平安時代和歌文学の研究」第二章「土佐日記と問答歌」 一九三頁
- 4 本文は『私家集大成 中古Ⅰ』による。底本は書陵部蔵(五〇一・一二三)略称「忠岑Ⅳ」を、校異の忠岑集は書陵部蔵(五一〇・一二)略称「忠岑Ⅲ」を、躬恒集は書陵部蔵(五〇一・二三五)略称「躬恒Ⅲ」を用いた。
- 5 角川文庫『古今和歌集』による。
- 6 問答歌の史的展開については、註3の書に詳しい。
- 7 「万葉集」の訓みは塙書房版による。
- 8 鈴木日出男「古代和歌における心物対応構造」(国語と国文学・昭和45年4月号)
- 9 片桐洋一「歌枕の成立」(国語と国文学 昭和45年4月号)